

# 三島中洲研究

社会システム研究科 文化・言語

2018M42001 肖 西汀

## 中文摘要

16 世纪阳明学自中国传入日本后，有学说认为，在德川幕府末期，阳明学成为了当时日本文人志士推动“倒幕运动”和开展“明治维新”的动力。日本阳明学初期是一场以改革日本精神界、救治堕落的国民道德品行、高扬日本国民道义以及维持国体发扬国威的社会运动。经过三宅雪岭、井上哲次郎等人的发展，形成了现今的日本阳明学。

作为当时著名的政治家、汉学家、法律家以及二松学舍创立者，三岛中洲的一生横跨幕末、明治和大正三个时代，从出身、求学、仕途、治学等方面可见其生平经历复杂、交友广泛、著述众多。三岛中洲个人的思想历经了从朱子学到折衷学再到阳明学的“三变”，并不断在参政治学的过程中批判性地吸收经世实用思想和功利主义思潮，形成自身独特的阳明学思想学说体系。

三岛中洲阳明学观念的形成，受到了吴廷翰及他老师山田方谷的影响。他认为，中国汉学可以分为“气学”、“人造学”以及“理学”，其中孟子、王阳明等学说应当被分类到气学之中。世间一切有活动力的有形无形之物都是“气”，并从王阳明的“理气合一”中推导出他自身的“气先理后”的理气合一观。这种以气为本的观念，显然受到吴廷翰“气本论”的影响。吴廷翰“气本论”的中心思想就是“气”是构成世间万物的原始物质，没有任何东西在“气”之前，也没有任何东西在“气”之上。山田方谷的理气观念也阐述了这一观点：王学的要义是“养气”，阳明学的思想也是以“气”为主。

同时，三岛中洲在评价王阳明治学标准之时提出，王阳明学说的根本在于“诚”，阳明学的最终目的是极尽诚意，“良知”二字只是唤醒世人的一种工具。这一阐述与中国传统以来将阳明学说理解为“心学”、“良知之学”迥异。中洲将阳明学理解为“诚意之学”的观点很大可能亦受其师山田方谷所影响，后者在《复春日潜庵书》曾提及王阳明的学说在于诚，但并不否认良知的价值，并认为世界诸国都曾用“良知”来教化国民。

若说“气先理后”的理气观是三岛中洲重要的阳明学观念，那么他自身思想的最集中最核心的体现就是“义利合一”。三岛中洲义利观念的发展最早体现在对中江兆民《论公利私利》的评价。中江兆民将“利”与代表着儒家道德伦理的“义”联系到了一起，并以此批判当时充斥社会的舍义取利的功利主义。

三岛中洲从理气论着手，将“义利”与“理气”相关联，将人欲理解为求生之欲，将追求“衣食住”理解为自爱之心，并结合孔子孟子等人话语，引经据典提出自爱是仁的极致。三岛中洲以此将人欲、利欲与儒家传统的仁义联系起来。此后，他的演讲进一步阐述更为完善的义利合一的观点。正如《学问的标准》所言，三岛中洲再次肯定人的生存欲望，并提出过分的欲望会导致恶果，需要用“义”来抑制过分的利欲之心。晚年中洲又通过《道德经济和一说》更进一步完善其义利观，将“义”等同于“道德”，将“利”诠释为“经济”，认为人世间的道德与经济是与天生养万物的“经济”、“道德”是等同的，认为经营经济必须合乎道德。

三岛中洲个人思想学说体系的内在核心是：利先义后的义利合一。一是，三岛中洲将“义利合一”与“理气合一”相联系，从“气先理后”的理气观亦可推导出，“义利合一”的内在同样是“利先义后”。二是，中洲在著述里多次提到“义是利中条理”，明确义利之间，利在义之先。三是，中洲屡屡反对宋儒“存天理去人欲”的观念，指出人生存的世界就是利欲的世界，天理便是人欲中的条理。因此，三岛中洲的义利合一说实质上是基于利先义后的义利合一。

“义利合一”还反映了三岛中洲的国家观念：如果为了国家之利，即便不义，最后也会回归到义上。同时，他将“义”与法律进行了关联，认为义是不成文的法律，而法则成文之义。

此外，三岛中洲的哲学思想还体现了经世实用主义、尊皇以及国家主义色彩。中洲在文稿里多次强调“忠孝”，认为忠孝是天理、是至善的美德；还要求做学问必须以关心国家大事为前提。

从一个经历复杂的思想家身上，往往可以折射出一个时代的学术思想与社会思潮的关联互动。

一方面，三岛中洲思想内核中“利先义后”、“义利合一”的形成及其对人欲的认可，除了其自身经世参政治学之外，也一定程度上受到了当时社会功利思潮的影响。

在西方文化的传入和明治维新的剧烈社会变革下，积淀于幕末学士文人思维框架中的人伦观念必然和西方近代社会中的人性论发生激烈的冲撞。在日本开国之前，日本思想界的主导思想是以儒学为中心的道德伦理主义；开国之后，思想家西周等开始提倡功利论，折衷功利论与儒学伦理，但依旧认为需要确立必要的伦理规范。随后在不断吸收西方文化的过程中，日本思想界出现纯粹利己的社会进化论和利己主义。正是在这一社会背景下，三岛中洲结合前人的思想，发展演变出其自身思想体系中的内核：利先义后的义利合一论。

另一方面，三岛中洲的思想学说对日本社会及近代以来的经济界产生颇为深远的影响。

比如，涩泽荣一的《论语与算盘》就是一个较为知名的例子。三岛中洲阐述自身义利合一说时会以“大算盘”和“小算盘”对孟子和阳虎的义利观念进行评价，从这一侧面或可认为涉泽荣

一很可能受到了三岛中洲思想学说的影响。对此，中国和日本部分研究也认同两者思想有着直接关联的说法。

## 要旨

16世紀、陽明学は中国から日本に導入された後、徳川幕府の末期に幕府の支配に反対し、維新志士の「倒幕運動」の展開や「明治維新」の推進を支持する学説になったといわれる。日本陽明学は、精神界を改革し、墮落した国民の道德品行を救い、日本国民の道義を高め、外に対して国体を保ち、国威を発揚することを目的とした社会運動である。三宅雪嶺、井上哲次郎などの人の発展により、今日の日本陽明学が形成された。

当時有名な政治家、漢学家、法律家及び二松学舎の創立者として、三島中洲の生涯は幕末、明治、大正と3つの時代に亘り、彼の出身、学問、仕途、地学などの面から、その生涯経歴が複雑で、交遊が広く、著述が多いことはわかる。三島中洲の思想は朱子から折衷学、そして陽明学への「三変」を経て、藩職と学問の過程で、批判的に経世実用思想と功利主義思潮を吸収し、自身の陽明学思想を形成した。

三島中洲陽明学の観念の形成は、呉廷翰と彼の先生山田方谷の影響を受けた。彼は、中国の漢学は「気学」、「人造学」及び「理学」に分けられ、そのうち孟子、王陽明などの学説は気学に分類されるべきだと考えている。世の中のあらゆる活動力のある有形無形のものはすべて「気」であり、さらに王陽明の「理気合一」から彼自身の「気先理後」の理気合一観を形成した。このような気を本とする観念は、明らかに呉廷翰の「気本論」の影響を受けている。呉廷翰の「気本論」の中心思想は、「気」は世の中の万物を構成する原始物質で、「気」より以前のものはなく、「気」より上のものもないということである。山田方谷の理気観念もこの観点を述べた。王学の要旨は「養気」であり、陽明学の思想も「気」を主としている。

同時に、三島中洲は王陽明の学問標準を評価する時、王陽明の学説の根本は「誠」にあり、陽明学の最終目的は誠意を尽くすことであると言った。「良知」という二文字は世人を呼び起こすための道具にすぎないと提出した。この説明は中国の伝統の陽明学説を「心学」「良知の学」と理解するの考え方とはずいぶん違っている。陽明学を「誠意の学」としてとらえた中洲の考えは、山田方谷からの影響を受けたかもしれない。後者は「復春日潜庵書」で王陽明の説は誠にあると述べたが、良知の価値は否定されず、世界各国が「良知」を使って国民を強化すると考えられている。

「気先理後」の理気論は三島中洲の重要な陽明学観と言ったら、「義利合一論」は彼自身の思想の最も集中的な表現といえる。三島中洲の「義利観」は、最初中江兆民の「論公利私利」に対する講評に現われる。中江兆民は、「利」と儒学の道德倫理を表す「義」を関連し、当時社会に満ちていた「義を捨てて利を取る功利主義」を批判する。

三島中洲は理気論から着手し、「義利」と「理気」を関連させ、人欲を生を求める欲求として捉え、「衣食居」を自愛の心として理解し、さらに孔子孟子たちの言葉を結合し、経典によって自愛は仁の極まりと指摘した。三島中洲はこれによって人欲もしくは利欲を儒学伝統の仁義に結び付けた。その後、彼の講演は義利合一論をさらに完成した。「学問の標準」にあるように、三島中洲は人々の生存への欲望を再び肯定した同時に、欲望がすぎると、悪になるという観点を提出し、過度の利欲心を抑制する必要があると指摘した。晩年の中洲はまた「道德経済合一説」を通じて更にその義利観を完成した。彼は「義」を道德、「利」を経済と言い換え、人間の「経済」や「道德」は天が万物を生養する「経済」と「道德」と対等して、経済を営むときは道德に合わなければいけないと考える。

三島中洲思想学説内在の核心は「利先義後」の「義利合一」である。まず、三島中洲は「義利合一」を「理気合一」と関連させ、彼の「気先理後」の理気観から「義利合一」の内面は「利先義後」と推測できる。次に、三島中洲は叙述に「義は利中の条理」と言及し、義と利の間に、利は義より先と明確した。そして、中洲は宋儒の「存天理滅人欲」を反対し、人間が生存する世界は利欲の世界で、天理は即ち人欲中の人欲と指摘した。したがって、三島中洲の「義利合一」は実際、「利先義後」に基づいた「義利合一」である。

また、「義利合一」は三島中洲の国家観念を反映している。彼は国家公衆のためなら、不義なことをしても、義に帰着すると考えられている。同時に、彼は「義」を法律と関連させ、義は不文の法、法は成文の義と考えられている。

その他、三島中洲の哲学思想は経世実用主義、尊皇及び国家主義色彩を体現した。中洲は文稿に「忠孝」を強調し、忠孝は「天則」、「天理」で、至善の美德だと思われる。また、学問は国事大事に注意しなければいけないと指摘した。

思想家の複雑な経歴から、その時代の学術思想と社会思潮との関係は見える。

三島中洲の「利先義後」、「義利合一」の形成及び人欲に対する認可は、彼自身の出仕学問の経歴以外、ある程度当時社会の功利主義思潮に影響を受けたかもしれない。

西洋文化の流入と明治維新の激しい社会変革の中で、幕末の学士文人の思想に積み重ねられた人倫観念は必ず西洋近代社会中の人性論と衝突する。日本が開国する前に、日本思想界の主導思想は儒学を中心とした道德倫理主義であった。開国以後、思想家西周などは功利論を提唱し、功利論と儒学倫理を折衷し、また倫理規範の確立は必要だと思われる。その後、西洋文化を吸収し続け、日本思想界には純粹利己的な社会進化論と利己主義が現れた。この社

会背景で、三島中洲は前人の思想に基づき、自身の思想を発展し、「義利合一」、「利先義後」の義利観を提出することができた。

三島中洲の学説は日本社会及び近代以来の経済界に頗る深い影響を与えた。

例えば、渋沢栄一の『論語と算盤』はよく知られている一例である。三島中洲は自身の「義利合一」を述べる時、「大算盤」と「小算盤」を使って、孟子と陽虎の義利観を評価した。この側面から、渋沢栄一は三島中洲の学説の影響を受けたと見られる。日本と中国の一部の研究者は渋沢と三島の思想には直接な関連があると考えられる所以である。